

# ビジョンストーリー 【旅行編】

星野はるかとは36歳。夫亮38歳と、長男ひなた8歳、長女はるる3歳の4人家族で、都内のマンションに暮らしている。はるかは大手メーカーで秘書をしているが、「子供がいても仕事はあきらめたくない」「しっかり自分のキャリアを築きたい」との信念を基に働いているため、ボスの信頼は厚く、後輩秘書からは尊敬される存在となっている。

夫亮との関係は良好で、家事は分担制となっており、亮は保育園の送り迎えなど育児を積極的に行い、はるかが残業の時は、買い物や食事の準備をするなど、いわゆる「イクメン」である。

ところが、長男ひなたが、発達障害のADHDとアスペルガー症候群を併せ持っていることが診断されたこともあって、はるかは仕事とひなたの対応に日々追われ、心休まる時がない日々を送っていた。

ある日、心休まる日がなく疲労困憊しているはるか心配した夫の亮が、「家族4人で旅行にでも行かない？」と声をかけてきた。

はるかは学生時代から旅行が趣味で、国内はもちろんのこと、海外旅行にもたくさん出かけていた。亮とは、ひなたが産まれるまでは年に数回は旅行に出かけていたほど、旅行が大好きなのだ。

ただ、ひなたが産まれてからは旅行どころではない生活に一変してしまった。ひなたの子育ては育児書通りにいかない困難の連続で、公園デビューではお友達と仲良くできずトラブルを起こしたのでその公園には行けなくなってしまったし、保育園では先生の指示や言うことが聞けないので、お迎えに行く度に先生から注意をされる毎日。そして、自宅マンションでもじっとしてられない、思い通りにならないとパニックになることから、近所からうるさいと苦情がくるので肩身の狭い思いをしていた。

のんきに旅行に誘ってきた亮に、はるかは間髪入れず「旅行なんて行けるわけじゃない！」と日々のストレスをぶつけるように言った。

すると、亮が一冊の旅行パンフレットをはるかに差し出した。



「発達障害のある子でも安心！お子さんと楽しい旅行の思い出を作ってみませんか？」  
その見出しを見た瞬間、はるかは食い入るようにパンフレットを読み始めた。

まず、ツアーの案内。他のお客様に気を使うことなく、また迷惑をかけないで済むように「発達障害のある子専用のツアー」となっている。このツアーは、発達障害の団体と専門家が監修しているとのことだ。まずそこに大きな安心を抱いた。そして、初めてのことが苦手、予想できないことに不安になる、ひなたのような発達障害の特徴に配慮して、イラストや写真などを使って、旅行の始まりから終わりまでがわかる冊子まで付録でついている。

「え、何？何？」なんとこのツアーは、空港と航空会社も一体となって、発達障害のある子にやさしい、安心・安全が連続されていると記載されているではないか！

はるかは目を疑いながらも、パンフレットを読み進めていった。

空港では、初めての場所が苦手な発達障害のある子のために、空港のことがやさしくわかるマップを用意してくれているとのこと。そして、トイレに1人で行くことができない発達障害のある子のために、異性同伴・母子同伴トイレが設置されているそう。そしてそのトイレには、「発達障害にやさしい」シンボルマークが貼られていて、周囲に気兼ねなく利用することができるそう。また、慣れない場所でパニックになりそうな時、またパニックになった時に利用できる「クールダウン・カムダウン」の場所が、いたるところに設置されているとのこと。そして、様々な音が行き交う空港で、聴覚過敏のある子がパニックにならないように、出国から到着まで、デジタル耳栓やイヤーマフの貸出を行ってくれるそう。

その貸出サービスは、航空会社でも行ってくれるそう。航空会社でも、飛行機内で快適に過ごせるように様々な配慮がなされている。旅行前に事前に搭乗体験ができるサービスがある！また、飛行機の座席は、端っこなどその子が落ち着ける場所を優先的に予約できる！そして、ストレスボールなど安心するグッズもプレゼントしてくれる！

はるかには、こんなにも発達障害のある子のために配慮されているツアーがある現実を夢ではないかと疑った。でも、それと同時に家族旅行という夢がこの瞬間に見えたこと、そして旅行にまた行ける希望が持てたこの瞬間、今までぐっと我慢してきた思いが爆発したように涙が溢れ出してきた。「ママ、どうしたの？」3歳になる長女のはるるが、ティッシュでやさしくはるかの顔を拭いてくれた。「旅行にね・・・、旅行にね・・・、行けるかもしれないのよ」「りょこお？」旅行に行ったことがないはるるは、きょとんとしてよくわからない様子。電車の本に夢中になっていたひなたが、そのやりとりに気が付いて、声をかけてきた。

「え！ 僕、旅行に行けるの！」ひなたの特徴から小さい頃から外出や旅行を控えてきたことに反して、ひなたは電車や飛行機に強い関心を持っていたため、ひなたの愛読本は電車と飛行機の本だった。「ひなた！ 飛行機に乗って旅行に行ける！」思わず、はるかはひなたを強く抱きしめた。

ひなたに発達障害があるからといって、電車や飛行機が好きなひなたに外出を制限してきた自分に対して、大きな罪悪感のはるかにはあった。愛おしくてたまらないひなたを旅行に連れて行ってあげることができる。嫌がるひなたを、強く、強く、はるかは抱きしめ続けた。その様子を見ていた涙もろい亮も、静かにぐっところえるように泣いていた。

それから3か月後。星野家にはいたるところに、旅行の写真が飾ってある。その写真を見る度にはるかはこう思うのだ。

世間にとっては、たかが旅行かもしれない。

でもこの旅行が、私達発達障害のある子の家族にとって大きな希望となり、そしてひなたの、そして私達家族の世界を広げてくれたことは間違いない。されど旅行なのだ！ ツアー会社の人、空港の人、航空会社の人、家族旅行という私の夢を叶えてくれた人たちを思い出すたび、感謝の気持ちと幸せな気持ちでいっぱいになるはるかであった。

